

## 北上川河口域における葦

調査地：宮城県石巻市北上町橋浦

調査日：2016 年 8 月 3 日

話 者：熊谷貞好さん 熊谷産業会長

調査者：松田睦彦\*、川島秀一、常光徹、安室知、山本志乃

\* 報告者・文責

### はじめに

2016 年 8 月 3 日に、宮城県石巻市北上町橋浦にある有限会社熊谷産業において、会長の熊谷貞好氏からお話をうかがった。熊谷氏は釜谷崎（現北上町橋浦）の出身で、昭和 9 年生まれの 81 歳（写真 1）。17 歳で茅屋根葺きの仕事を始め、同社を国指定の文化財も手掛ける日本有数の茅葺屋根工事の会社に育て上げた（写真 2）。

今回うかがったのは、北上川下流の汽水域に広がる茅場としての葦原（よしはら）の環境とその利用についてである。対象となる時代には現在も含まれているが、お話の多くは集落が葦原の管理をし、葦を刈る作業が共同でおこなわれていた 30 年以上前のことにそそがれた。

### 昔の集落と屋根葺き

葦を刈る葦原というのは各集落の貴重な財産だった。昔の農家はみんな草屋（茅葺き屋根）だった。集落にはどこでも契約講というものがあって、役員が世話役をして順番に傷んだ屋根を葺き替えた。屋根を修復する



写真 1 葦刈鎌を持った熊谷貞好氏



写真 2 外壁に茅が葺かれた熊谷産業の社屋

ときは、ユイといって、集落の家すべてがたずさわって作業をした。作業に使う手縄は、各家から何尋という割り当てがあって、それを持ち寄って作業をした。中心となる職人は雇ったが、そうした作業を毎年繰り返すので、集落のほとんどの人は半職人のようになっていた。

昔は、集落のなかで結束力があって、冠婚葬祭でも、どこかの家で人が亡くなると、各家が、まずは米一升を用意した。食べ物があれば亡くなった人を弔うことができるということだ。昔は生活的にも厳しかったから、団結力があつたのだと思う。

ユイで作業をする草屋というのは本当にお金のかからないものである。それが、だんだんと農家がなくなったり、みんな勤めに出るようになってきて、ユイの作業をお返しすることができなくなってしまった。

屋根の工事は自分が17歳の時にはじめての仕事である。この仕事は、集落で余る葦があって、それを分けてもらってはじめて。屋根の仕事がなくなってきてからは、材料の供給をしていたこともある。もともとは半職人。集落の屋根葺きの手伝いをしていたが、屋根葺きの仕事をするようになって、5年ほど親方について本格的に技術を習得した。一般的に、屋根屋というのは農家との掛け持ちで仕事をするが多かった。だから、屋根葺きは農閑期にする仕事である。

葦原の権利は、川沿いの集落がそれぞれ持っていたが、集落が権利を放棄した後は、橋浦地区生産組合と農業組合法人の「ゆいっこ」が管理している。ただ、河川敷そのものは国土交通省の管轄である。したがって、現在は、作業にともなうさまざまな届け出を国土交通省にしなければならない。

### 北上川河口域の葦と北上大堰

熊谷産業で屋根葺きに使っている葦は地元でとれたものがおもである。北上川の下流域では、古くから相当の量の葦をとることができた。この葦原は汽水域にあり、全国の葦原でも独特の環境である。地方によっては浜葦と呼ばれている（写真3）。

質の高い葦は固く、色は黄金色で穂がしっかりとしている。汽水という環境が良い葦を育てるのである（写真4）。ただ、これは自然のものであり、その年によって出来はわからない。周期があるようにも思える。去年よかったから今年も良いとは限らないのである。

葦は2メートル以上の長さになるが、場所によって育ち方が違う。屋根に使う葦は細い方が良い。細ければ屋根1平米あたりの本数が増えることになる。3メートルほどに伸びる場所の葦は、屋根ではなく簾にもちいる。

また、釜谷地区では海苔簾の材料として一番良い葦がとれた。砂地に生える細い葦である。青いうちに刈って、葉を落として、乾燥させる。それを生産組合が買い取って1メートルほどの長さに切り、気仙沼をはじめ、三重県の桑名の方まで、海苔簾の材料として送っていた。

現在、追波湾（おっぱわん）に注ぐ北上川は、もとも



写真3 北上川下流の汽水域にひろがる葦原



写真4 葦

と旧北上川から分かれた追波川であった。明治44年から昭和9年まで、追波川の開削工事がおこなわれて、現在の北上川の流れとなった。旧北上川とは柳津で分岐している。

昭和54年に、河口から約17キロの地点に北上大堰が完成すると、上水道や灌漑用水、女川原発等の工業用水に川の水が引かれるようになり、また、追波湾からさかのぼる海水が止められたことから、以前よりも下流域の塩分濃度が上がるようになった（写真5）。

また、昔は北上川が増水すると、ヘドロや砂などが葦原に流れ込んだ。水が引いて葦原がかわくと、土が亀の甲羅のように割れた。これが栄養分になったのだが、堰ができてからはそういうこともなくなった。山の広葉樹が減って、水の栄養が少なくなったことも影響しているかもしれない。

最近の葦は以前よりも柔らかくなり、全体的に長持ちしなくなってきた。琵琶湖では強い葦を育てるために葦原に砂を入れているが、ここの葦原は国土交通省の管轄の河川のため許可が下りない。



写真5 北上大堰

### 葦を刈る作業

葦を刈り取る作業は毎年12月から3月までおこなわれる。機械化の前は葦切鎌で葦を刈っていた。刈った葦の切り口が刺さらないよう、下駄をはいて作業をした。潮が大きく引く、夕方から夜にかけて作業をした。川に氷が張っているような状態で、足が寒かったが、集落みんなで刈りに出たので、あっという間に刈ることができた。

葦のひとしめは、今は小さいけれども、昔は3尺の長さの藁縄だった。25本の藁縄の束をふたつ持っていく。世話係の人は、はじめのひと束がおわると「一服だよー」と知らせる。一服だということは、ただ、休むのではない。この間に鎌を研ぐ。ふたたび作業をはじめて、世話係の人のもうひと束がなくなると「終わったかー」と声をかける。作業をするほかの人は、藁縄が残っていても、それで作業を終えたので、葦の束の数があわないということがよくあった。刈った葦は立てて縛っておき、潮が満ちてきたときに船で運んだ。刈り取った葦は50しめずつ重ねて、くじを引いて平等に分けた。

3月に刈り取りを終え、4月に入ると1ヶ月間は火入れをする。火を入れる作業は、15、6人でおこなう。火の入れ方はその日の条件にもよるが、風下から一度火を入れて消し、防火帯をつくる。その後、ふたたび風上から火を入れる。

火入れをしないと雑草が増えてしまう。また、火を入れると灰の影響で芽吹きが良くなる。山と同じで、人の手を入れて残していくのである。

4月に火入れをした後は、葦原とかかわる仕事はない。8月に穂が出ると、その年の葦のでき具合がわかる。

北上川下流域の葦は、地震による地盤沈下で全然だめになってしまった。良い葦が育つまでにはまだまだ時間がかかるだろう。